

# ジェイン・オースティン『マンスフィールド・パーク』 に見る「聖職叙任」の意味

—「聖職者」「ジェントリ」「商人」「軍人」をめぐる—

土 屋 倭 子

## 1 「聖職叙任」という主題

一八一三年一月二九日、ジェイン・オースティンがスティーブントン牧師館に滞在していた姉カサンドラ宛に書いた手紙は彼女の抑えきれない、高揚した気分を生き生きと伝えている。前日の『モーニング・クロニクル』誌に、待ちに待った『高慢と偏見』の出版広告が掲載されたのだ。“I want to tell you that I have got my own darling Child from London, …”「私だけの愛しい子供がやっとロンドンから届いたことをお話しするわ」<sup>(1)</sup>と『高慢と偏見』のことを「私だけの愛しい子供」と呼んだ。子供の頭文字は大文字になっている。「私だけの愛しい子供」という言い方にジェイン・オースティンの自分の作品への、熱い想いが感じられる。これは一八一一年一〇月に『分別と多感』が出版されて以来の快挙であり、ジェイン・オースティンにとっては二冊目の出版となった。First Impressionsとして書きためていたものが、ようやくに日の目を見たのだった。

そしてその同じ手紙の後半であの誤解を招いた一文がくる。“Now I will try to write of something else; — it shall be a complete change of subject — Ordination.”この文はジェイン・オースティンが『マンスフィールド・パーク』の主題について述べたのではなく、カサンドラに一七八七年に行われた兄 James Austen の聖職叙任について問い合わせたもので、手紙の中の話の転換を示す言葉として現在は解釈されている。Le Faye の注によれば、『マンス

フィールド・パーク』の主題と読むのは少々早まった解釈だというのだ。<sup>(2)</sup>

なぜならこの時点でジェイン・オースティンはすでに『マンスフィールド・パーク』の二巻七章(全四八章中の二五章)まで書き進めていたと考えられるからである。この手紙の直前一八一三年一月二四日付きの手紙に『マンスフィールド・パーク』の登場人物であるグラント夫人について書かれているからだ。二五章まで書き進めていて、今更これから書くとして主題を述べるのは不自然と取られても仕方がない。Le Fayeの解釈を妥当とする見方に現在は落ち着いているようだ。しかし筆者には疑問も残る。手紙の中で話題を変えるにはやや言葉遣いが大げさなのだ。『高慢と偏見』がやっと日の目を見た今、あらためて作家としてこれからの決意と自負を打ち明けたと考えることも充分可能なのではないかと。この shall は「なるでしょう」といった単純未来ではない。「とする」という意志の表明であると解釈されるからだ。

実際『マンスフィールド・パーク』という作品では「聖職叙任」のもつ意味は大きい。これほど牧師の聖職を正面切って扱った作品はジェイン・オースティンには他にはない。筆者には“… it shall be a complete change of subject”の shall に作者の意図が込められているように思われる。がともかく「聖職叙任」は、『マンスフィールド・パーク』の中心的主題であることは作品を読めば明らかである。以下「聖職叙任」が扱われたこの作品での作者の意図を考え、その主題が当時の「聖職者」「ジェントリ」「商人」「軍人」の階層の人々にどのような道徳的な意味を持って投げかけられていたのかを歴史的、社会的に分析し、『マンスフィールド・パーク』の主題が特にこの時代と密接に関係している、ジェイン・オースティンの小説の中では極めて“conduct book”、“condition of England novel”の特質を示していることを考察する。

Cambridge 版 *Mansfield Park* の Introduction を書いた John Wiltshire によれば『マンスフィールド・パーク』は一八一一年二月から一八一三年六月にかけて書かれたとされ、小説中の事件は奴隷貿易禁止法が成立した一八〇七年九月を考慮すると、一八〇八―九年に起きていると考えられるとしている。

そもそも『マンスフィールド・パーク』はファニーで始まりファニーで終わる小説である。物語はファニーをポーツマスからマンスフィールド・パークへ引き取る話から始まる。その後物語は紆余曲折を経て、貧しい家庭から引き取られたファニーが、次男のエドモンド・バートラムと目出度く結婚することで終わる。ジェイン・オースティンの六つの小説は全てヒロインの結婚というハッピーエンドで終わるのは有名だが、チョートン時代に書かれた後半の『マンスフィールド・パーク』『エマ』『説得』の場合は前期の三作品と

比べて、ヒロインのそれぞれ幸せな結婚に微妙な翳りがあると筆者は考える。

『マンスフィールド・パーク』の場合、ファニーの幸福な結婚は「聖職叙任」と結びついたものである。ファニーは牧師になろうとするエドマンズの聖職叙任を支え、牧師になってからも彼の牧師としての生活を終始一貫支え励まし続けることになるだろう。それは決して社会的地位と経済的安定を約束されただけの玉の輿ではない。それぞれのヒロインの未来は、それぞれのヒロインの努力と責任にかかっているからだ。『マンスフィールド・パーク』では聖職者の使命が、『エマ』ではドンウェル荘園の発展が、『説得』ではウェントワース大佐の海軍での将来がヒロインたちと結びついている。

『エマ』については、エマには「ジェントリ」としてのジョージ・ナイトリーとのドンウェル荘園の堅実な相続維持の責任が託されているし、『説得』のアン・エリオットの将来は一財産作った海軍軍人ウェントワース大佐との裕福な生活であろうが、軍人という職業に当然付いて回る不安や危険を受け入れたうえで築き上げられるものであろう。ファニーもエマもアンもそれぞれの階層の道徳的使命を託されているのだ。

ファニーは慣れないマンスフィールド・パークで、いつもノリス夫人や家庭教師など他人の目を気にして暮らしている。そのような時エドマンズから優しい言葉や行為を示されて、一人涙を流す。このようなファニーではあるが、その成長を通して次第にエドマンズを励ます役割を果たし始める。小さくか弱いエドマンズのメンター的な役割を演じるようになるのは注目すべきであろう。

このファニーの役割をより鮮明に打ち出すために、エドマンズとファニーのプロットが中心にしっかり存在する。そしてその周りに、メアリー・クロフォードとエドマンズ、そしてヘンリー・クロフォードとマライア・バートラム、ヘンリー・クロフォードとファニーのサブプロットが展開する仕組みとなっている。メインプロットとサブプロットが絡み合いながら、作中人物の複雑な心理が時に細密画のように描写される。例えばファニーがエドマンズに寄せる密かな想いやエドマンズとミス・クロフォードを見やりながらファニーがそっと漏らす残酷な笑みなど。そこには心理小説家ジェイン・オースティンのまさに真骨頂が見出される。<sup>(3)</sup>

本稿ではそうして描かれたファニーと「聖職叙任」とのコンテクストに注目する。ファニーは物語の始めから終わりまで、ほとんどぶれない唯一の人物である。それゆえに、ぶれるエドマンズのメンターとなる。ファニーはエドマンズがその実態を見抜けないミス・クロフォードから、目を覚まさせる

存在となる。ある意味でファニーはジェイン・オースティンの代弁者でなければならなかったのである。

『マンスフィールド・パーク』のファニーとエドマンドの結婚はいとこ同士ということで、問題を生じる恐れがないわけでもなかったらしい。作品中でもサー・トマスがそれは考えられない話だとファニーに話す場面もある(32章)。しかしカサンドラが『マンスフィールド・パーク』のプロットについてミス・クロフォードとエドマンド、ファニーとヘンリー・クロフォードが結ばれる結論を提案したのに対して、ジェイン・オースティンは断固として応じなかったという<sup>(4)</sup>。ジェイン・オースティンとしてはこの小説の主題はファニーの導きによるエドマンドの覚醒にあったわけだから、そしてミス・クロフォードとヘンリー・クロフォードの実体の暴露にあったわけだから、カサンドラの提案を受け入れることなどできなかったのは当然であろう。

英国国教会の教区牧師の娘であったジェイン・オースティンにとって、牧師の生活はまさに日常生活そのものであったろう。朝晩の礼拝はもちろん、日曜ごとに父の説教を聞くことは勤めであり、教会のしきたりは当たり前のこととして日々の生活に溶け込んでいたであろう。ジェイン・オースティンは父が長男ジェイムズに聖職録を譲って、一八〇一年五月初めにステイブントン牧師館を出てバースに移り住むまで、約二五年間牧師館で生活した。

長兄ジェイムズと四兄ヘンリーはオックスフォードに学び、共に牧師となった。最愛の姉カサンドラの婚約者も牧師だった。カサンドラの婚約者トム・ファウルは、将来の聖職録任命権を持つクラヴァン卿の依頼を拒むことができないままに、お抱えの従軍牧師として西インド諸島に同行した。一七九六年一月一〇日に風向きが良ければ出港するとジェインに書いている<sup>(5)</sup>。そして翌年三月の帰国を前に、二月セント・ドミンゴで黄熱病のため死亡した<sup>(6)</sup>。カサンドラが牧師の妻として母と同じような人生を歩むだろうというオースティン一家の夢は無残に潰えた。一家にとっては一大事件であった。カサンドラはこの試練に毅然として耐えたとジェイン・オースティンは伝えている。<sup>(7)</sup>

このようにいわば牧師一家とも言えるジェイン・オースティンの家族であるが、当時の牧師はどのようにして牧師となり、どのような生活を送っていたのだろうか。以下は主として Irene Collins, *Jane Austen and the Clergy* によるものである。一八世紀末、イングランドとウエールズにあったとされる約一万一千六百の聖職録のうち、約二千五百の叙任権は高位聖職者たち、主教や聖堂参事会員に握られていた。約六百は Oxford や Cambridge の学寮や有

名な私立学校に、約一千一百が国王の管轄下に、そして約五千五百が個々の大地主に属していた。それらは“patronage”（引き立て）や“connections”（縁故関係）によって授与されたのである<sup>(8)</sup>。この間の事情は当然のことながらジェイン・オースティンの熟知していたことであろう。

こうした国教会制度の中で牧師になるにはどのような道が決められていたのか。この制度のもとで牧師になるには Oxford か Cambridge の学位は必須のものであった。しかし、たとえ学位があったとしてもこの制度下で聖職のポストを得ることはかなり厳しかった。具体的な聖職録を得るには、高位聖職関係者や王室や大学関係者、また大地主との縁故関係がものを言ったからである。またこの聖職叙任権は所有者にとっては一種の財産とみなされ、広告などによって売りに出されることもあり、一種の投機の対象にもなったという。それは聖職が少なくともある一定の収入を保証され、牧師館という住居を与えられ、紳士階級の一員となる職業とされていたからだ。聖職録が売買の対象になることには批判もあったが、公然と行われていたのも事実であった。

しかもこうした聖職録のあるポストが得られない場合、志願者はその空位を何年も待たなくてはならなかったし、時にはやむなく安い俸給の副牧師の職に甘んじなくてはならなかった。貧しい家庭の子弟が Oxford や Cambridge に入学するための奨学金を得るのも縁故がものを言った。こうした事情はトマス・ハーディの『日陰者ジュード』（一八九六）の一場面を強烈に想起させる。貧しいジュードは一念発起してクライストミンスターに入学して牧師になろうと志ざし、学寮長に手紙を書く。待ちに待ったジュードに届いた返事は「（そのような身分不相応なことは考えないで）自分の分際留まれ」という忠告であった。ジュードはクライストミンスターの壁を見つめて嘆く。「ただの壁、だがなんという（高く超えがたい）壁であることか！」と<sup>(9)</sup>。それはジュードには到底超えることのできない壁であった。

英国国教会制度とはその成立以来、国が守り続けてきた体制である。そもそも Oxford や Cambridge は国家の体制維持のために、英国国教会の聖職者を養成することを目的として設立された大学であった。当時卒業生の約六〇パーセントが聖職者を目指し、九—一〇パーセントが医業関係や法律関係を志したとされる。

それでは彼らの大半が目指したとされる聖職録のある教区牧師はどのような状況におかれていたのだろうか。コリンズによると一八一七年の資料ではイングランドの一万五百の教区の大多数は五百人以下の教区民しかいなかっ

たし、約三千の教区は二百人以下、九百六十の教区は百人以下であったという。ロンドン都市として発展し、人口を増やしていたが、当時人口の五分の三はまだ田舎に住んでいた。<sup>(10)</sup>

当然のことながら教区民の少ない教区では十分の一税も少ない。多くの教区牧師の聖職禄はかなり安いものであった。一八〇二年の議会の資料によるとイングランドとウエールズの約一千の聖職禄は年収£100であり、約三千は£100から£150であったという。そのために約三分の一の牧師は教区があまり離れていない限り二箇所の聖職禄を得ていた。いわゆる“plural holdings”（聖職兼任）の問題が生じていた。牧師の生活レベルの維持のためには公然と認められていた制度であった。<sup>(11)</sup>

こうした中でステーブントンの教区牧師であったジョージ・オースティン家の生活はどのようなものだったのか。父ジョージ・オースティンは一七六四年四月二六日にカサンドラと結婚し、ステーブントンの教区牧師の禄を得た。ステーブントンの聖職禄は£100 p.a. だった。彼らはしばらく近くのデーン牧師館に住み、ジョージは馬でステーブントンに通ったという<sup>(12)</sup>。一七七一年三月にデーンの牧師職がやっと空き、ジョージ・オースティンは£110 p. a. とされたここの牧師を兼ねることができた。ジョージ・オースティンも聖職兼任をして家族が増えるにつれて増加する出費をまかなったのである。

ジョージ・オースティンには他家で育ててもらっている障害を持った次男がいたからその養育代の負担もあったし、ナイト家の養子となったエドワードを除いて、四人の息子たちにはそれぞれ紳士としての教育を受けさせなければならなかった。ジェームズとヘンリーはOxfordへ、フランクとチャールズは本人たちの希望もあってRoyal Naval Academy at Portsmouthで教育を受けさせた。フランクは一七八六年四月、チャールズは五年後一七九一年七月に入学している。軍関係の子弟ではない二人には£50 p. a. の費用がかかったという<sup>(13)</sup>。カサンドラとジェインも短期間ではあったが、寄宿学校で教育を受けている。一七八五年春一歳になったカサンドラがレディングの寄宿学校に行くことになった時、九歳のジェインはどうしても姉と共に行きたいと言いはった。教育に理解が深かった両親はジェインも共に送り返した。しかし£35 p. a. という授業料と寄宿寮費の負担のために一七八六年暮には自宅に戻り、ジェインのその後の教育は家庭でなされたという。<sup>(14)</sup>

父ジョージ・オースティンの家計は聖職禄と十分の一税、教会付属の土地や地主から好意で提供された農場からの収入であったが、十分の一税も農場

からの収入も時の穀物の価格に左右された。ジョージ・オースティンは農業経営にも力を注ぎ、そのための専業の執事も雇った。大地主ナイト家の養子となった三男エドワードとは農場経営についてよく相談して知恵を借り、穀物市場の動向にも注意を怠らなかつたという。

ジョージ・オースティンは一家の収入を増すために近隣のジェントリの子弟を預かって教育して教育者としても活躍した。まずは教区牧師であったが、同時に教育者でもあり、また小規模の農場経営者でもあるというのが実態であった。聖職者という面と生活者という立場が一体化していて、牧師は少ない禄を補う副業に精を出さざるを得ないというのが実情であつたらしい。聖職兼務はやむを得ない事態として受け入れられていたといえよう。牧師にとって聖職禄授与権を持つパトロンとしての貴族や大地主の意向は収入に関わるだけに顧慮しないわけにはいかない問題でもあつたろう。

当時英国国教会が制度として直面していたこうした問題は決して単純なものではなかつたであろう。それは長い歴史の中で作られた制度であり、そこには社会の上層階級による国教会制度と牧師の支配という不愉快な現実が厳然と存在した。しかしこの国教会制度は英国の国是であり根幹となる制度として存在していた。ジェイン・オースティンは矛盾を感じながらも、自分が牧師の娘であり、父はその国教会制度の中樞を荷う一員であることは充分理解していたであろう。ジェイン・オースティンはこの幾多の問題をかかえているが、ある意味では自分の血肉でもある国教会制度、その中心的な主題「聖職叙任」とその諸問題を取り上げないわけにはいかなかつたのではないか。Collinsは述べている。“Like many people of her time, she believed that it was possible to operate a corrupt system incorruptly.”<sup>(15)</sup> その信念があえてこの時期、時代の墮落した現状を憂えて、「聖職叙任」を主題とした『マンスフィールド・パーク』を書いたと筆者は考える。

## 2 「聖職者」

ジェイン・オースティンの六冊の小説全てに牧師が登場する。もっとも有名なのは『高慢と偏見』のコリンズ牧師や『エマ』のエルトン牧師であろう。この二人の俗物根性はジェイン・オースティンによって痛烈に批判され、嘲笑と憐憫の対象になっている。自身が国教会牧師の娘でありながら、なぜここまで彼らを痛烈な笑いの対象にするのだろうか。いや牧師の娘として内情を熟知していたからこそ、笑い者にしたのだろうか。ジェイン・オースティ

ンの厳しい視線は俗物的な聖職者階級に向けられた。多くの牧師自身が直面する問題が『マンスフィールド・パーク』では主題として扱われることになる。

『マンスフィールド・パーク』では「聖職叙任」が「真面目な」中心主題となって展開するが、発端はラッシュワース邸のソザトン・コートでジュリア・バートラムが漏らした何気ない一言による。「エドモンドお兄さまが、もう聖職についていればいいのに！」(9章)<sup>(16)</sup> この思いがけない言葉に表情を変えたミス・クロフォードは「聖職叙任式？」と言い返し、「それじゃ、あなたは牧師になるんですか？」と驚いてエドモンドに尋ねた。二人の会話は次のように続く。

「それじゃバートラムさん、あなたは牧師になるのね。ちょっと驚いたわ」「なぜ驚くんです？」とエドモンドは言った。「ぼくが職業につかなくてはならないのはお分かりでしょ？　そして、ぼくが弁護士にも、陸軍軍人にも、海軍軍人にも向いていないこともお分かりでしょ？」  
「たしかにそうね。でも、あなたが牧師になるなんて、思ってもいなかったの。……」

……「それじゃあなたは、自分から進んで牧師になる人は絶対にいないと思っているんですか？」

「絶対という言葉は強すぎるわね。でも、会話で、「絶対」と言うときは、「めったに」という意味だから、その意味ではそうだと思うわ。だって、牧師に何ができるって言うの？　男性はみんな有名になりたいと思っているし、ほかの職業なら、頑張れば有名になれるかもしれないけど、牧師じゃだめだわ。牧師じゃ、有名になれる望みは全くないわ」(9章)

このようなミス・クロフォードの意見に対して、エドモンドは牧師の役割について自分の意見を真剣に述べる。

「……牧師という仕事は、個人的な問題においても、集団的な問題においても、現世的な問題においても、永遠的な問題においても、人間にとって最も重要な問題にたいする重大な任務を持っているのです。つまり牧師は、宗教と道徳を守る任務を持っているのです。そして宗教と道徳の影響力の所産である風俗習慣を守る任務を持っているのです。このような任務に全く意味がないなどとは言えないはずです。……」



エドマンドの口吻には聖書のエコーさえ感じられる。これに対してミス・クロフォードは言い返す。「あなたは牧師にたいして、ずいぶん重大な任務を負わせているのね。牧師がそんな重大な任務を背負っているなんて聞いたこともないし、私にはまったく理解できないわ。・・・」と。エドマンドの牧師という使命にかける夢はミス・クロフォードには一顧だにされず、彼女は次のように言い放つのだ。「あなたが牧師になるなんて、私にはほんとに驚きで、まだぜんぜん信じられませんもの。あなたはもっといい職業に向いているはずよ。考え直したほうがいいわ。いまからでも遅くはないわ。弁護士になりなさいよ」とまで言う。こうして九章ではエドマンドとミス・クロフォードの牧師という職に対する考えの違いが徹底的に対比されることになる。

さらに一章では聖職禄をめぐる“patronage”の問題がまさに赤裸々に取り上げられてエドマンドとミス・クロフォードの間で議論される。こうした問題がこれほど正面切って取り上げられるのは『マンスフィールド・パーク』だけであることはもっと注目されて良い。二人の会話のポイントを辿ってみよう。「ぼくが牧師になるのは、マライアの結婚と同じで、まったく自発的なものです」と自分の立場を述べるエドマンドに対して、ミス・クロフォードは皮肉な口調で言う。

「あなたの希望と、お父さまのご都合が、うまく一致してよかったですね。マンスフィールドの近くに、あなたに用意された立派な聖職禄がおりなんでしょうね」

「そんなこと絶対ないわ」とファニーが横から口を出した。

「ファニー、助太刀をありがとう」とエドマンドは言った。「でもぼくは、絶対ないとまでは言わない。それどころかぼくは、自分に聖職禄が用意されているとわかったから牧師になる気になったのかもしれない。でも、それが悪いことだとは思わない。ぼくは牧師になるのをいやだと思ったことは一度もない。それに、安定した生活が約束されていることを若い時に知った人間は、みんな無能な牧師になると言う理屈はぼくにはわからない。……でも、たしかにぼくは、自分に聖職禄が用意されているとわかったから、牧師になる気になったのかもしれない。それは否定しない。でもそれが悪いことだとは思わない」(11章)(下線筆者)

エドマンドが自分の立場を弁護し、ファニーが助太刀したにもかかわらず、

言い募るミス・クロフォードに対してエドモンドは続けた。「しかし聖職禄を保証されて牧師になる人間の動機はあまり立派ではないと、あなたはおっしゃりたいんですね」「立派な動機だと思われるためには、聖職録が保証されていない状態で牧師にならなくてはいけない、ということですね」と。それに対してミス・クロフォードは「あら、とんでもない！ 聖職禄もないのに牧師になるなんて狂気の沙汰だわ。とんでもないわ！」と嘲る。(下線筆者)

こうした激した感情のままに喋るミス・クロフォードの牧師批判の言葉ほど激しいものはあまりないのではなかろうか。彼女はグラント博士の例をとって牧師の生活を徹底的に揶揄する。

「ええ、もちろん、牧師になる人はとても真剣よ。苦勞して収入を得るよりも安定した収入を好むという点にかけてはね。そして一生、食べることと、飲むことと、太ること以外は何もしないという点にかけてはね。でもそれは怠惰ということだわ、パートラムさん。それは怠惰な生活であり、安逸を貪るということだわ。立派な野心もないし、すばらしい友達を得ようともしないし、人を楽しませようという努力もしない。そういう人が牧師になるのよ。牧師はただ不精でわがままなだけよ。新聞を読んで、天気を見て、奥さんと口喧嘩して、一生を終えるのよ。教会の仕事は、副牧師が全部してくれるし、本人の大事な仕事は、おいしいご馳走を食べることだけだわ」(11章)(下線筆者)

聖職禄を保証された牧師の安逸で怠惰な生活がこれほど侮蔑的に描かれることはあまりないかもしれない。コリンズ牧師やエルトン牧師でさえも顔を赤らめるような牧師の墮落した姿がここでは示されている。牧師という仕事を単なる安定した職業と決めつける見方はヘンリー・クロフォードによっても示される。

「パートラムは、もうすぐ聖職禄を手に入れるそうだけど、グラント博士は、彼にその聖職禄のことを教えているんだ。……湯水のように使えるほどの収入が手に入るんだ。しかも、何の苦勞もしないで手に入るんだ。年収七百ポンドを下らないんじゃないかな。次男で年収七百ポンドあれば大したもんだ。……そしてその身を捧げる仕事としては、クリスマスと復活祭の時に、教会で説教をするだけでいいんだから結構なことだ」(23章)

このようなミス・クロフォードやヘンリー・クロフォードの牧師に対する批判は当時世間で聞かれたものでもあったろう。それらに対するエドマンズの真摯な発言もまた多くの真面目な牧師たちの使命感を代表するものであったろう。それらを生々しく取り上げたところに、「聖職叙任」を主題とした『マンスフィールド・パーク』の意味を見出すべきであろう。

ミス・クロフォードにとっては田舎の牧師という職業は、その収入、辺鄙な環境、つまらない近隣づきあいなど、華やかなロンドン生活に比べるべくもない。だからと言って、エドマンズはミス・クロフォードのために自分の職を変えることはできない。物語の後半はファニーとヘンリーの関係が中心となって展開し、エドマンズとミス・クロフォードの関係は背後に遠く感じとなる。しかしミス・クロフォードの実体が把握できず懊悩するエドマンズをファニーが常に側面から支え、慰め、ついに目覚めさせるという少し回りくどい展開となっていくが、一貫してファニーの重要な役割は変わらない。そしてついにエドマンズはミス・クロフォードの実体に目覚め、ファニーを伴侶としてソーントン・レイシー牧師館、やがてはマンスフィールド・パーク牧師館に住むことで物語はめでたく幕を閉じる。この結末に難色を示したカサンドラにジェイン・オースティンが頑として反対したことは前述した。結末は物語の主題と密接に関係しているのだから、反対は当然のことであったろう。

教区牧師の娘として日々国教会の典礼の中で生きていたジェイン・オースティンにとって、国教会の教え全ては父の教えであり、聖書の教えであり、何よりも神の教えであった。彼女の信仰は穏健な国教会のものであった。彼女にとって宗教とは国教会であり、国教会に限られていたことも注目されるべきであろう。彼女自身が書いた祈祷文は *The Book of Common Prayer* を色濃く反映していて、彼女が英国国教会の典礼に精通していたことを表している<sup>(17)</sup>。そしてジェイン・オースティンはエドマンズと同じように、“the role of the church in rural England from the inside”を強調した<sup>(18)</sup>。このことはまたトマス・ハーディの言葉を想起させる。「私は教会に通うことの意味は信じています。それはひとつの修練であり、人は何か大切なものを持たなければなりません。もし田舎の村に教会というものがなかったら何もないのと同じだからです」と。若き日には牧師を志したが、チャールズ・ダーウインの進化論を拍手で迎え、キリスト教の神を否定し、国教会制度を弾劾し、真剣に「宇宙内在の意思」を模索しながら不可知論者として生を終えたトマス・ハーディの、生涯を通して「教会寄り」と言われた晩年の言葉である。<sup>(19)</sup>

ジェイン・オースティンの信仰はまさに国教会のものであり、彼女のキリスト教への真摯な信仰心を疑う伝記はない。ただその信仰は死の少し前から福音主義にたいして少し寛容になったという。一八〇九年一月二四日カサンドラに宛てて「福音主義者は嫌いだ」<sup>(20)</sup>と書いたジェイン・オースティンは、一八一四年一月一日のファニー・ナイトには「自分が納得して信じるのなら福音主義者もいい」<sup>(21)</sup>とまで譲歩する態度を示しているからだ。銀行が破産した後牧師になったヘンリーにも福音主義の傾向がみられたし、フランクも軍人には珍しい信仰の篤い人として知られていた。カリカチュア化され嘲笑の対象となった牧師たち、しかしジェイン・オースティンの根底にはエドモンドに託した真摯なメッセージがあった。

### 3 「ジェントリ」

『マンスフィールド・パーク』で展開された聖職制度への批判はその体制を支える最も重要な土台の一つとなっている「ジェントリ」階級への批判に繋がっている。小説の題名マンスフィールド・パークとはノーサンプトン州の大地主である準男爵サー・トマス・バートラムの広大な屋敷のことである。サー・トマスは広い地所を所有し、大邸宅を誇る。地方の大地主の多くがそうであるように、国会議員であり、議会の開期中はロンドンに滞在することになっている。

ファニーが引き取られた時、「バートラム家の子供たちはみんな器量が良くて、二人の息子はとても美男子で、二人のお嬢さまは目の覚めるような美人だった。おまけに四人とも発育が良くて、すらりとした立派な体型をしていた。そのため、教育程度の違いから生じる物腰の違いだけでなく、容姿の点でも、ファニーとは歴然たる違いがあった。二人のお嬢さまとファニーがほぼ同じ年だとは誰も思わないだろう」(2章)といった具合だ。階級格差は個人の体型にまで影響を与えていたのだ。

二人の息子たちはイートン校からオックスフォードに学んでいたし、二人の娘たちは家庭教師によって良家の子女にふさわしい教養を身につけていた。バートラム夫人は玉の輿に乗った安逸を享受しているかに見えたのだ。誰もこの一家の安定と将来の繁栄を疑っていないかのようにであった。

しかしこの幸福を絵に描いたようなジェントリの代表的な一家に不安の陰りが冒頭の一章から見えるのだ。プライス夫人の手紙である。ファニーの母はバートラム夫人の妹だが、貧しい海軍将校と結婚したためにポーツマスで

子沢山の貧乏暮らしをしている。そこで義兄のサー・トマスに手紙を書いた。「一番上は十歳の男の子で、とても元気が良く、早く世間に出て働きたいと言っていますが、女の私に何ができるでしょう？ 西インド諸島にあるサー・トマス所有の農園で、何か働き口はないでしょうか？ どんな仕事でも構いません。あるいは、サー・トマスはウリッジのことはどうお考えでしょうか？ あるいは、男の子を東洋へ送り出すには、どうすればいいのでしょうか？」(1章)と。

サー・トマスの地所の経営がなんらかの形で遠い西インド諸島の外の世界とつながっていることが冒頭から示されるのだ。これは安定そのものと思われているマンスフィールド・パークの経済的基盤が不安定な植民地の農園と関係していることを示している。「アンティグア島の農園からの収入が減ったら、パートラム家の財政も苦しくなるんじゃない？」(3章)と心配するノリス夫人に対して、パートラム夫人は「あら、あれはすぐに解決するわ。主人が手紙を書いていたわ」と軽く考えている。ところが一年もしないうちに、事態は悪化して「サー・トマスは、パートラム家の財政を立て直すために、みずからアンティグア島へ行く必要がある」と考えるに至った。

安定と繁栄の象徴ともみえる典型的な「ジェントリ」の経済的基盤が、遠い海の彼方の西インド諸島のアンティグア島に関係していた。アンティグア島は当時シュガープランテーションとして最もよく知られたイギリスの植民地であったし、当然奴隷貿易や奴隷制度と密接に結びついた記号であったといえよう。

サー・トマスにとってこのアンティグア問題(奴隷制農園の問題)はなかなか片付かず、物語の進展を通して時々言及されることになる。問題は見え隠れしながら、小説の基底部に存在する。サー・トマスの留守の間に、長女マライアと近隣の大地主ラッシュワース氏との交際がノリス夫人の肝いりで始まる。マライアがラッシュワースに関心を持つのは彼の年収一万二千ポンドとロンドンの邸宅であることが強調される。

このような状況の中で客として牧師館にやって来たグラント夫人の異父弟妹であるクロフォード兄妹が登場する。ミス・クロフォードは海軍で成功し一財産築き、今やトウィッケナムに別宅を購入するほどの金持ちになった叔父クロフォード提督が自慢の種である。ミス・クロフォードの世界は全てが金の尺度で測られるものであった。彼女の牧師に対する考えは先に見た通りだ。

サー・トマスは権威ある父親のように振る舞ってはいるが、結局彼の立

場は「ジェントリ」の地位と財力に依存したものに過ぎないことを暴露する。サー・トマスの留守中に始められた素人劇 *Lover's Vow* の準備はサー・トマスの突然の帰国によって中止となる。長男トムの不品行や浪費癖は「ジェントリ」が抱える問題を示す。このような経済的にも道徳的にも不安定な一家の中で堅実で道徳的なファニーはいつも孤独である。姦通を主題とした劇の内容が相応しくないと思うのはファニーだけだし、サー・トマスのアンティグアの仕事に関心を示すのもファニーだけだ。ファニーが話題に触れようとすると、重苦しい沈黙が一座を支配する。皆が沈黙したのはアンティグアが当然まだ実施されていた奴隷制度を想起させるからだ。ジェイン・オースティンが意識してこの場を書いていたことは当然であろう。『エマ』の三七章でエルトン夫人がジェイン・フェアファックスの家庭教師の仕事についてやりとりする有名な場面があるが、「人間の肉ではなくて、人間の知性を売る斡旋所」という言葉はすぐその後に来る“slave-trade”と“governess-trade”という語彙の連続で意図的に用いられていると考えられる。<sup>(22)</sup>

サー・トマスのマライアとファニーへの態度は「ジェントリ」階級の持つ自惚れ、虚栄、偽善、欺瞞、無節操、無責任をあますところなく示すものとなって、彼は徹底的に批判されることになる。サー・トマスはマライアの結婚に一抹の不安を覚える。彼は「地位と財産の面で、非常に歓迎すべき縁談だということは確かだし、婚約してからすでにだいぶ月日がたって、世間にも知れわたってしまったが、娘の幸せを犠牲にするわけにはいかない」(21章)と一応は真面目に思ったのだ。サー・トマスはマライアと真剣に話をしようと決心した。ところが話し合ってみると、マライアはきっぱりと彼と結婚して幸せになれると断言した。サー・トマスはどのように自分を納得させたか。「サー・トマスはこれを聞いてすっかり満足し、満足している自分にも満足し、この問題をそれ以上は突きつめて考えなかった」のだ。サー・トマスは考える。「自分の夫がそんなにすばらしい人物でなくても構わないというのなら、そのほかの点では、ラッシュワース氏は社会的地位といい、財産といい、マライアにとっては、まったく申し分のない結婚相手なのだ」などと思い直し、自分を納得させる。これで「破談という世間体の悪い不幸、世間の人々の驚き、そしてそれに伴う騒がしい噂や非難をなんとか避けることができ、自分の社会的地位と影響力を高めてくれる縁組が確実なものになったのだ。そして、その目的のためにたいへん都合がいいことに、マライアがあまり感受性の鋭い子でなくてよかったと——つまりラッシュワース氏のような人物で満足するような子でよかったと——サー・トマスは大いに喜んだ」(21章)のだった。

彼の道徳心はその程度のものであり、本心は地位と財産を至上のもののみならず、ジェントリに染み付いた虚栄と欺瞞と無責任そのものであった。

またファニーにヘンリーとの結婚を勧める時もこのような玉の輿を受け入れないとはどういうことかと問い詰める。「おまえはいま十八歳だが、これからさらに十八年生きたとしても、クロフォード君の半分の財産と、十分の一の長所しか持っていない青年からでさえ、もう二度とプロポーズされることはないかもしれない……」(32章)と脅迫めいた言葉で説得する。サー・トマスにとって、結局のところ結婚とは社会的地位と財産の問題でしかなかったのだ。

こうした「ジェントリ」の価値観はラッシュワース夫人の言葉にも見事に体现されている。ジュリアとヘンリーのカップルを見た夫人は言う。

「あら、ジュリアさんとクロフォードさんね。そうね、とてもすてきなカップルね。あの方の財産はどれくらいですか？」

「年収四千ポンドですわ」

「それは結構ね」とラッシュワース夫人は言った。「上を見たら切りがありませんからね。年収四千ポンドといえば立派な財産よ。……」

ラッシュワース家の年収はその三倍の一万二千ポンドであり、夫人の言葉の端々に自分の財産への誇らしさがみえる。

当時の“landed-gentry”の経済基盤は様々な分野への投資や植民地の農場経営など多岐にわたっていたのだが、農業経営から見た時、注目されるのは“enclosure”(囲い込み)の進展だという。一七八〇年代から囲い込みは増加していたが、一七九二年のフランスとの開戦以来、地主たちは効率的な囲い込みに愛国的大義を見出したという。その結果一八〇〇年から一八〇五年の間に国会における全ての囲い込み事案の四十パーセント以上、五四七の案件が成立したという<sup>(23)</sup>。地主たちにとって農場経営の改善はブームとなり、成功した大地主は潤ったが、共有地は減少し零細地主や貧しい小作人たちは苦しい立場に追いやられた。大地主と雖も、バートラム家のように浪費家の子供に悩まされることもあり、植民地の農場経営にまで手を出す地主もいたのである。

オースティン家の三男エドワードはゴドマーシャムのナイト家の養子となったが、典型的な“landed-gentry”として彼は地所の管理に励み、地主というよりビジネスマンのように仕事に精出したという。(裕福で、なんの問題

もなく、しようと思えばできるのに) 野外のスポーツや狩りなどの金のかかる趣味はなく、地所の管理が一番の関心事であつたらしい<sup>(24)</sup>。地所を真剣に適切に管理することはそれほどまでに精力を要したということかもしれない。

結局、『マンスフィールド・パーク』はサー・トマスに自らの過ちを気づかせ、マライアとノリス夫人を放逐し、トムを重病ののちに少し改心させ、そしてその道徳的中心にファニーとエドモンドを置くことで、崩壊と再生のドラマを完遂する。ファニーは「ジェントリ」の道徳的再建の柱としてマンスフィールド・パークの実質的な女主人になって物語は終わる。

『マンスフィールド・パーク』でかろうじて「ジェントリ」の再生を託したジェイン・オースティンは次作『エマ』において理想の「ジェントリ」の姿をジョージ・ナイトリーのドンウェル・アビイに示したのではないか。変動する社会の中での「ジェントリ」のあり方をナイトリーと精神的に成長を遂げたエマは実現できるのではないかと。

ナイトリーのドンウェル・アビイではソザトン・コートのような仰々しい新規な改良はなされない。大地主のナイトリーは将来に備えて、馬車も無駄には乗らない。執事と緊密な連絡を取りながら農場の改善に努め、借地人たちの立場には配慮を怠らず、治安判事として常に教区の村人全体のことをそっと気遣う。アビイという古めかしい名前が象徴するように、それは中世からの理想の領主の館を彷彿とさせる。そこには緑滴る森や木々に覆われた小道があり、これこそイングランドの緑地と言える美しさに囲まれている。そこにはいく世代にもわたって彼のような慈愛溢れる領主によって守られてきた古き良き英国の農村の姿が彷彿とする。ドンウェル・アビイにはこうした古き良き英国のメッセージ—理想の“landed-gentry”の未来—が示唆されている。が託されているといえよう。<sup>(25)</sup>

#### 4 「商人」

ジェイン・オースティンの小説ではいわゆる商工業に従事する人たちの具体的な生活はほとんど描かれぬ。彼らは「ジェントリ」が点在しながらいわば支配し君臨する農村コミュニティに外部から侵入してくる階層として描かれる。彼らは何らかの手段、商工業や植民地との交易や軍隊など、によって獲得した資産によって地所を購入して新たに「ジェントリ」の階層に参入してくる人たちとして描かれることはほとんどない。



『高慢と偏見』のサー・ウィリアム・ルーカスはメリトンで商売により一財産作り、町の市長をつとめ、ナイト爵に叙せられたのちに、自分の仕事や小さな町に嫌気がさして、地所を購入、ルーカス・ロッジと名付けて「ジェントリ」の一員として落ち着いた。彼はひとかどのジェントリ気取りだが、それが最近得た地位であることは誰もが知っていて、ベネット夫人は自分一家(年収二千ポンド)よりは少し下に見ている。

近隣の邸宅の新しい借り手として、たちまち噂の種になるピングリーは十万ポンドの財産を持っているとされるが、その財産は父から譲り受けたものだ。妹たちも二万ポンドの財産を持っていて、「イングランド北部の相当の家柄の出で、それが彼らの記憶の深くに刻み込まれ、兄と自分たちの財産が商売で儲けられたものだという事情の方は忘れがちだった」(4章)(下線筆者)。ピングリーは譲り受けた「商売で得た財産」で立派な地所を購入して、“landed-gentry”として落ち着こうと思っている。「イングランド北部」という地名はこの時代、ある種の意味が込められていたのではないか。リヴァプールは奴隷貿易や植民地との交易で最も知られた北部の港であり、その後背地は諸外国との交易により、さまざまな商工業で栄えたことは衆知の事実であったし、そうした事業への大地主や金持ちの商人らの投資もよく見られたことであつたから。時代は下がるが、トマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』(1891)でも、イギリスの北部という地名はなんとなく怪しい使われ方をしている。テスが親戚を名乗って尋ねて行ったダーバヴィルの家名は全くの偽物で、アレックの父サイモン・ストークスはイングランドの北部で金貸しとも噂のある何かの商売で一財産作った人物だった。<sup>(26)</sup>(下線筆者)

「ジェントリ」と「商人」の関係について、ジョン・ブリュアは興味深い指摘をしている。そもそもブリュアは『財政＝軍事国家の衝撃』において一七一八世紀においてブリテンがヨーロッパ第一の強国になった事情を分析するのだが、「ブリテンの政治体を動かし、同盟国や敵国をうならせたあの力業をやり遂げた、隠れた筋力を明らかにする」として、「政府機構、兵站、とりわけ資金調達」に焦点を当てている<sup>(27)</sup>。ブリュアによれば、ブリテンの抜きん出た資金調達力と政府機構の優秀性が強調されることになるのだが、「ジェントリ」と「商人」の関係について次のように指摘していることは興味深い。

一八世紀に地主出身の官職保有者が増えたことは、重要な社会的影響を二つ与えた。地元の地所に住まないジェントリの数が増えたこと、ジェントリとそれ以下の社会層とのあいだの社会的区分線がはっきりひかれ

るようになったことである。地主層は、金持ちの商人や事業家出身の女性と結婚しつづけた。しかし、一七世紀のジェントルマンの子弟が実業界に入り、シティの徒弟奉公に出たのに対して、陸海軍人や中級役人のキャリアが好まれるようになるにつれて、この慣行はすたれていった。かくして公共の善のために役人として奉仕する人と、私的な富や利益を求めて働く人との区別は、固定化されることになった。公の職務を果たす義務はジェントルマンたるものの本質的要件とみなされており、従って官職保有は、その要件を満たさない商売や事業、金融との対比において、このジェントルマン理念に適っていたからである。……一八世紀末になると、土地所有層は一〇〇年前にはまずみられなかったような、商売を慇懃に卑下する態度を取るようになった。<sup>(28)</sup>

『エマ』にもまさにそのような「ジェントリ」階級の商人蔑視と紳士気取りが描かれる。『エマ』のコール家も新参者である。何代にもわたって住んできたウッドハウス家が君臨するハートフィールドにおずおずと入ってくるのは何かはっきりしないが商売で財産を築いたらしいコール家である。エマはコール家のことをあまりよく思っていない。新参者であるのに、最近でしゃばりすぎてきたと思いはじめていたのだ。

コール家は数年前からハイベリーに住み始めたが、とても感じの良い人達だった。愛想が良く、おうようで、気取らない人達だ。しかし一方で生まれはよくなくて、商売の出で、あまり品が良いとは言えなかった。この地に来たての頃は、収入に応じた身分相応の生活をして、おとなしく狭い範囲の付き合いを慎ましくしていた。それがここ一、二年で金回りが良くなったようで、ロンドンの商売が大いに儲かっているらしく、一家の景気が上向いていた。金回りが良くなるにつれて一家の望みも大きくなった。家も大きくしたいし、お付き合いももっと広げたいということになった。一家は家を建て増し、召使いの数を増やし、あらゆる出費を増やして、今では財産と生活様式ではハートフィールドにつぐ地位を占めるに至っていた。彼らは社交好きで、彼らの新しく作った食堂は、晚餐会に誰でも呼ぶことができるほどのものだった。(25章)

エマには、だからと言ってコール家がハイベリーの最上の地位に君臨するハートフィールドやドンウエルやランドルの人たちを招待するなどあまりに

も出すぎた行為に思われるのだ。たとえ招待されても、絶対にあのような人たちの家には行かないと心に決めていたのに、ドンウエルもランドルもすでに招待を受けていたとは！そこにコール家から丁寧な招待状が届いて、エマの自尊心もくすぐられ、出席することで一件着落となるのだが、“landed-gentry”の階層意識を表す格好な事例といえよう。

ジェイン・オースティンの時代、多くの商工業や後述する軍人などの多くは一財産築くと、紳士としての体面を保てる地位として地所を求めて落ち着いた。“landed-gentry”の仲間入りをすることは、金儲けに成功した商人たちの究極の落ち着き先の一つでもあったのだ。ある歴史家の分析によると一七六〇—一八一九の間に約一パーセントのカントリーハウスが新しく金を得た世代によって購入されたという<sup>(29)</sup>。彼らの侵入は誰にも止めることはできなかった。

Stephanie Barzewski, *Country Houses and the British Empire, 1700–1930*によれば<sup>(30)</sup>カントリーハウスは主として“colonial merchants”や“Indian nabobs”や“West Indian Planters”や“military officers”らによって購入されているが、購入の最盛期はそれぞれ彼らが最も収益を上げた時期と重なっているとして、詳細な分析を行っている。そこには購入の時期や場所などの細かい分析がなされている。がそれとともに地所を得て“country gentry”としての安定した暮らしの夢を抱きながら、夢が果たされないままに異国の地で病や海の事故で斃れ無念の涙を呑んだ多くの人々の話も伝えている。彼らは商人や軍人としての危険な日々を生き抜いて一財産築いたからには、何とかして安定していると信じた地主階級の仲間入りをしたかったと思われる。実態はマンスフィールド・パークに見たように、彼らの財政基盤も決して磐石のものではなく、不安定な植民地農園とつながっていたのだけれど。

大土地所有に基盤を置く貴族・ジェントリ階級は長子相続制度を維持することで、制度の存続を図ってきたから、こうした大きな所領が売りに出されることは減多になかったという<sup>(31)</sup>。だから一九世紀を通してブリテンにおいては大土地所有者による支配が続いた。相続から外れた次男以下の息子たちは、それぞれ官吏、軍人、植民地の役人、商人などとなって活躍し、大英帝国のジェントルマン・資本主義の躍進に励んだことは歴史に詳しい。しかし中にはマンスフィールド・パークのように息子の浪費に悩んだり、奢侈による支出の増大でやむなく貸し出されるケリンチ・ホールのような例もあったし、また借金のためにやむなく売りに出される地所もあったと思われる。

ダニエル・デフォーが『完璧なイギリス商人』(*The Complete English*

*Tradesman*, 1725) や『イギリス通商案』(*A Plan of the English Commerce*, 1728) で繰り返す名言“an Estate is a Pond, but Trade is a Spring.”がつとに喝破していたように、一八世紀の後半から一九世紀の初めにかけてブリテンはいわゆる商業革命、続く産業革命を経て農業国家から一大産業国家へと変貌を遂げた。この時代商工業の発展、海外交易の拡大、特に海軍の膨張など眼を見張るものがあった。「商人」というカッコでくくられる中には広義の意味合いの人々が含まれる。国内の商工業者はもちろんのこと、増大する海外との交易に関わる商人や船主やそれらに関係する金融業者や保険業者などがいた。こうした多様な人々が多大の利益を得たことはもちろんであるが、そうした事業に国債も含めて投資した人たちも多く存在した。ジェントリといえども投資や蓄財から巧みに利益を得ていたことも事実である。

ジェイン・オースティンが生きた時代はまさにブリテンが農業国から産業国家へと転換した時代と重なる。一七九〇年から一八二〇年の間で経済は前例を見ない年二―三パーセントの成長をしたという。ナポレオン戦争に勝利した一八一五年ブリテンはヨーロッパで最も豊かな国となり、特にその海軍力はフランスをしのいで他国の追従を許さないものとなっていた。<sup>(32)</sup>

しかしその経済の実態は「不安定な転換期」でもあったという。一七九七年二月七日時の首相ウィリアム・ピットは戦争のために増大する戦費を賄うために初めてイングランド銀行支払停止を実行した。一八二一年五月一五日までの処置であったが金融関係には多大の不安を醸成した<sup>(33)</sup>。金融制度も信用制度もまだ不備不完全なままの中であまりにも急速な経済発展の事態が進んでいった。

このような中でジェイン・オースティンの四兄ヘンリーの活動は始まったのだ。ある意味でこの時代の風潮を最もよく体現したのがヘンリーの活動とも言える。商人、そしてバンカーとしてのヘンリーはジェイン・オースティンの小説の出版に関しては多大な影響を与えることになった。もともとオックスフォードを卒業したヘンリーは牧師になる予定だったが、その前の二七九三年国家防衛に参加するためにオックスフォード州のミリシアに“commission”(買官による将校任命権)により参加し、一八〇〇年まで留まった<sup>(34)</sup>。ミリシア軍は外国に出兵することはなかったが、ナポレオン戦時下、敵の上陸に備えて国防に当たった。

その後ヘンリーは軍との関係を生かして軍関係の業者となり、のちに当時は多く存在したバンカーの一人となり、ロンドンに事務所を構えて一時はかなり成功する。この時期を通して、ヘンリーがジェイン・オースティンの小

説出版のために重要な役割を果たしたことはよく知られている。<sup>(35)</sup>

ジェイン・オースティンはヘンリーのおかげで当時のロンドンの華やかな社交の場や裕福な商人たちの世界を垣間見ることができた。ヘンリーは一八一五年の終わりに突然破産し、彼の銀行に投資していた兄ジェイムズやエドワードたちは総額三万ポンドにのぼる損失を被ったという。ジェイン・オースティンも『マンスフィールド・パーク』から得たお金も含む二六ポンドを失った<sup>(36)</sup>。ヘンリーはその後福音主義的傾向の強い牧師となり生涯を終えた。ある意味で時代を象徴するような浮き沈みを見せるヘンリーの生涯であるが、その生き方は『サンディトン』のパーカー氏に反映されているともいわれる。

ブリテンの一八世紀後半から一九世紀初頭にかけての劇的な経済発展を支えたのは何と言っても海外との交易であり、その中心には奴隷貿易と海外の植民地の奴隷制プランテーションからの利益があった。一八〇三年、時の宰相ウイリアム・ピットは奴隷貿易とアメリカや西インド諸島などの植民地の奴隷制プランテーションからの利益は海外貿易利益の四分の一を占めると述べている<sup>(37)</sup>。歴史家の間で正確な数値には一致がないものの、一八、九世紀を通してのブリテンの経済発展に植民地との奴隷貿易、奴隷制プランテーションからの利益が基本的に重要であったことには変わりはない。

奴隷貿易の黄金期は一七〇〇年ごろから一八〇八年とされ、この間に「他のどの時代よりも多くの奴隷が」輸送された、その数は全体の三分の二にのぼる。そして黄金期のかずの四〇パーセント以上、つまり全部で三〇〇万人を運んだのがイギリス及びアメリカの船だった。<sup>(38)</sup>

奴隷貿易は William Wilberforth (1759-1833) らの尽力により一八〇七年の奴隷貿易禁止法により、ようやく禁止される。一七八〇年代の後半には反奴隷貿易のキャンペーンはすでにイギリス議会において高まり、一般大衆の間でもかなりの支持を得ていた<sup>(39)</sup>。しかしウイルバフォースが禁止法成立のためにいかに苦勞したかはよく知られている。西インド諸島の利益を代表する多数の議員が反対の声をあげていたからだ。けっして簡単に成立した法ではなかった。

ジェイン・オースティンは『マンスフィールド・パーク』の構想を一八一一年二月ごろから考え始めたと言われるから、禁止法成立の余波は十分感じられていたと思われる。ジェイン・オースティンは一八一三年一月二四日のカサンドラへの手紙でトマス・クラークソン (1760-1846) の本を感動して読んだことを伝えている<sup>(40)</sup>。ただ同じ手紙で Captain Pasley の本にも感

動したとあるのはどう解釈すればいいのか。Captain Pasley とは *Essay on the Military Policy and Institutions of the British Empire* (1810) で知られる軍人であり、植民地政策の推進者の代表であったのだから。とても面白く、力強い書き方で、実に感心したとある。

何れにしてもこうした稀に見る経済的な変動の只中で最も重要視されたのはカネの力であった。カネはカネを生むから、投資あるいは投機は人々を熱く引きつけることになる。この時代、投資は人々の常識であったのだろうか。ジェイン・オースティンの父ジョージ・オースティンもオックスフォード時代の学友が所有するアンティグアの農園の保管者であった<sup>(41)</sup>。ジェイン・オースティン自身も小説出版で稼いだ六百ポンドは5%の利子がつく海軍国債に投資していて、ヘンリーの破産の損失から免れたという<sup>(42)</sup>。当時お金は大体年利5%の利子を生むものと考えられていた。

ミス・クロフォードにとって全てはカネで買えるものである。ミス・クロフォードには「お金で何でも手に入るという、ロンドン流のやり方が身にしみついてしまって」(6章) いる。ミス・クロフォードにとっては、トムの病気も、その死さえも、カネで測られるものなのだ。ファニーにはわかっていたのだ。「ミス・クロフォードがエドマンドと仲直りしたいと思うようになったのは、トムの病状の悪化(つまり、エドマンドがパートラム家を継ぐ可能性が出てきたこと)と大きく関係しているかもしれない」(47章) ということが。彼らは人の死さえ、カネのためなら願う。人間としての最低の倫理観すらもない。そこにはゾッとするような、恐ろしい人間の墮落が示唆されている。クロフォード兄妹の価値観から『マンスフィールド・パーク』を守るのがエドマンドとファニーという構図が見えてくるであろう。ジェイン・オースティンが問うているのは、カネのために大切なものを忘れていないか？ カネより大切なものがあるのではないか？ それが聖書の教えであり、それこそ国教会の牧師が教えることではないのか？ といえよう。『マンスフィールド・パーク』はクロフォード兄妹の道徳心の敗退の物語として意図されている。

## 5 「軍人」

ジェイン・オースティンの小説にはなぜあれほど数多くの軍人が登場するのだろうか。『高慢と偏見』のリディアはブライトンに駐屯する将校たちに夢中だし、挙げ句の果てに士官ウィッカムと駆け落ちして、北部のニューカッス

ルの連隊へと消える。陸軍と同様に海軍軍人も多い。『説得』でバースの街を右往左往する海軍将校の姿も見られる。ケリンチ・ホールの新しい借り手は退役したクロフト提督であり、極め付きはアン・エリオットと結婚するウェントワース大佐であろう。彼の友人の海軍士官も数多く登場する。牧師やジェントリと同じくらい、いやそれ以上に軍人が登場するのがジェイン・オースティンの小説なのだ。

この背景には、「第二次百年戦争」(1689-1815)と呼ばれるフランスとの相次ぐ戦争がある。名誉革命(1689)から「イギリスとフランスのあいだで、王位継承、海外領土、通商、そしてアメリカ独立、フランス革命、ナポレオン帝国をめぐる戦争」<sup>(43)</sup>が続いた。この間歇的に続いた戦争はウエリントンがワーテルローで勝利を納めたことで終結した。「一六八八年を境に、ブリテンの軍事活動は劇的な変化を遂げた」<sup>(44)</sup>とされる。「一六八〇年から一七八〇年までの一〇〇年間で、ブリテンの陸海軍は三倍の規模になったといえよう。この一〇〇年間に、ブリテンは五つの大きな戦争を経験した・・・(この意味したことは)軍事衝突が頻繁におこり、戦争が再燃する可能性が常にあったということ(であり)「平時にあっても厳密には平和ではなかったことになる。植民地の境界線付近や海上貿易のルートに当たる海域では、大国の臣民どうしが日常的に小規模な小競り合いを繰り返していた」<sup>(45)</sup>のが実情であった。

ナポレオン戦争時代、フランス軍の上陸に備えて、人々の不安を鎮めるためにイギリス国内のあちこちに急造のバラックの駐屯地が作られた。こうした駐屯地に陸海軍の士官や兵士が集結したから、地方の関心を集めることになった。フランスとの戦争(1793-1815)で海軍兵力は戦争前の三万から一八一〇年のピーク時には四倍以上の一四万に増加し、陸軍兵力は一八一二年までに四万五千から二五万の五倍に増加した。<sup>(46)</sup>

特にブリテンの特徴とされたのはその海軍重視の方針であったとされる。海軍のドックや造船所や港湾など、ブリテンは世界に誇る設備を有していた。ジェイン・オースティンは五兄フランクと弟チャールズが海軍将校であったから、特に海軍の事情にはかなり通じていたと思われる。当時陸軍では将校任命書は売買の対象であり、いわゆる買官制が存在していた。実際には“commission”で昇進したのは二〇％程度とされている。一〇％が“patronage”により、大体七〇％は年功序列によって昇進したという。しかしこの買官制度は結果として資産と教育のある、戦時には信頼できる人材を将校として集めることができる制度でもあったといわれる<sup>(47)</sup>。その結果駐屯地の若い、

資産家の将校たちは地元の娘たちの格好な花婿候補として憧れの対象ともなったのだ。

海軍の場合は将校任命書の売買は禁止されていて、昇進は年功序列原則を基本としていたが、内部での細かな決定に関しては“patronage”が関与することも多かった。『マンスフィールド・パーク』のウィリアムがクロフォード提督の口利きで昇進するのがその例である。さらに海軍の場合は“prize money”（捕獲賞金）（船長や副船長など上位の乗組員は敵船を捕獲した場合、その船や積荷を売って自分らの賞金とすることができた）を得ることもあり、ウェントワース大佐のように大金を手に入れる幸運もあった。中産層の普通の若者が海軍で一攫千金の夢を持つこともできたのだ。

貴族やジェントリ、また牧師の親の資産や職業を継ぐことのできない次男、三男以下の子どもらにとって、聖職の次に選ばれたのが陸軍、海軍の将校であり、それに法律関係、薬学医学関係が続いた。前述したように貴族やジェントリにあっては次男、三男のうち一人は軍隊に入るといえるのはよく見られたことだった。兄弟揃って軍人という例も珍しくなかったらしい。<sup>(48)</sup>

ジェイン・オースティンの一家を見ても長兄ジェイムズが父のあとを継いで牧師となり、三兄エドワードはゴドマーシャムの典型的な“landed-gentry”となり、四兄ヘンリーは軍人、バンカー、聖職者と変転の人生を送った。五兄フランクと弟チャールズは海軍軍人になった。まさに兄弟は聖職者、ジェントリ、商人、軍人となっていた。これはジェントリ階層がいかに繋がっていたかを示す好例であろう。フランクとチャールズは紳士階級の子弟として、希望して海軍軍人の道に進んだ。ジョージ・オースティンは二人を Royal Navy Academy at Portsmouth で教育を受けさせ士官としてキャリアを始める道を拓いている。軍関係者でなかったオースティン家のような立場の者の授業料は寄宿料なども含めて、年 50 ポンドだった<sup>(49)</sup>。授業料はオースティン家のような牧師の家計にとっては決して容易に払える額ではなかった。

一七八八年一二月二三日フランクは海軍士官候補生として東インド諸島へと出航するが、その時彼はその直前に父から送られた長い手紙を大切に持っていた。父からの手紙はまず神の教えを説き、これからの軍人としての人生の歩み方への父親としての愛情の溢れた、心打つ道德的かつ実務的な教えに充ちたものであった。海軍将校としてのキャリアを歩み始めた息子へのこの牧師の父からの教訓はどれほどフランクの心を励ましたことであろう<sup>(50)</sup>。「フランスはこの手紙を宝物とした。そして九一歳で彼が死を迎えた時、その手紙は私的な書類の中に見つかった——濡れた痕が残り、へりは焼け焦



げ、何度となく読み返されたために擦り切れていた」<sup>(51)</sup>。父ジョージはその後、フランクやチャールズの昇進を願って関係筋に時に依頼の手紙を書いてもいる。

フランクとチャールズは時には直接戦闘に参加したり、時には母国の商船保護の活動に従軍したり、その東奔西走の多忙な生活はジェイン・オースティンの手紙から生々しく伝わってくる。海軍では水兵たちは急に募集したり、強制的に徴兵されたので、彼らの怠惰や日常的な喧嘩を統率するために上官による暴力が日常化していた。そうした中でフランクは“the officer who knelt in church”<sup>(52)</sup>として知られていた。父の教えはフランクの生涯を貫いていたのであろう。

ジェイン・オースティンは当時の海軍の状況についてかなり該博な知識を兄弟から得ていたと思われるし、また海軍関係の執筆にあたっては常に最新の専門的知識を得ようと努力していたことが手紙などからわかる。フランクは一八六三年に the Admiral of the Fleet に昇進し、チャールズは一八五〇年 Rear Admiral and Commander-in-Chief of the East India and China Station に登りつめた。<sup>(53)</sup>

貴族やジェントリ、牧師の次男、三男以下の多くが陸海軍の将校への道を選んだことは前述した。ブリュアによれば、「陸海軍将校は、自らのステイタスと実力を大いに自負していた。ささやかな幸運——奪った戦利品の一つ、めざましい活躍をみせた戦闘が一つでも——に恵まれれば、名誉と富を一度に手に入れることができる。どんなに悪くても、そこそこのジェントルマン程度の収入はある。将校は誇りをもって軍服を着用した（軍服が規定されたのは一七四〇年代である）。……肖像画にみえる陸海軍将校は、どうだといわんばかりに軍服を着込み、軍用行李に囲まれ、背景は戦勝の場面に彩られている」<sup>(54)</sup>。軍服はかれらのステイタス・シンボルであった。『マンスフィールド・パーク』ではウィリアムが海軍少尉に昇進したと軍服の関係が語られるし（37章）三八章ではポーツマスに里帰りしたファニーの前にウィリアムがまぶしいような軍服姿で現れる場面が描かれている。

『マンスフィールド・パーク』では二つのタイプの軍人像が描かれている。非難されているのはまずはクロフォード提督に代表されるような、成金になった軍人の奢侈と墮落、下品さである。彼らは手に入れた大金のために目がくらみ、不道德な生活を送っている。もう一つのタイプは下品な軍人である。退役海軍将校のプライスは下品な大酒飲みでポーツマスに帰ってきたファニーを悲しませる。（38章）。

プライス家は騒音と混乱に支配され、礼儀作法などまったくない家だった。自分の役割をきちんと果たすものは一人もいないし、家の中で正しく行なわれることは何ひとつなかった。ファニーは両親を尊敬したいと思ったが、残念ながら尊敬することはできなかった。父親のことは、最初からあまり期待はしていなかったが、彼女が覚悟していた以上に、プライス氏は家のことはまったくほったらかしで、生活習慣もだらしなく、態度もものすごく下品だった。けっして無能な人ではないのだが、自分の職業つまり海軍関係以外のことには、何の好奇心も知識もなかった。読むものは新聞と『海軍要覧』だけで、話すことは海軍工廠と港と、戦艦の停泊地であるスピットヘッドとマザーヘッドのことだけだった。絶えず悪態については酒を飲み、ものすごく汚ならしくて下品だった。ファニーの記憶では、父親から愛情のこもった優しい扱いを受けたことは一度もなかった。粗野で声が大きいという印象が残っているだけだった。そしていまもプライス氏は、ファニーにはほとんど関心を示さず、ときどき下品な冗談を浴びせるだけだった。(39章)

ここには貧しく、粗野で、下品な海軍軍人の一面があますところなく取り上げられている。軍人の数が驚くばかりに急増した時代には軍人はかき集められたわけだから、こうした資質や傾向は当然予測されたことであったと思われる。嘲笑と憐憫の対象として描かれたウィロビーやウィッカムのような、カネのために右往左往する将校もまたよく見られたと考えられる。彼らの道徳心を喪失し聖書の教えを忘れた、快樂的な自己本位の生活が厳しく批判されたのだ。

彼らに対して、ウィリアム・プライスは前途洋々とした未来を持つ若き将校として描かれる。ウィリアムは真面目で、ファニーを思う優しさを持ち、縁故によるが、父とは違って士官となり出世して、ついには紳士への道を歩むことになるだろう。そしファニーやスーザンと共にウィリアムもまたマンフィールド・パークを立て直す新しい力となっていくことを予感させる。そして『説得』ではウェントワース大佐に代表される海軍軍人の誠実で、気取らない、しかも自由闊達で、人間味あふれる世界が、地位とカネにしか目のない、エリオット家の「ジェントリ」と対比され、アンの選択は「軍人」が「ジェントリ」の時代を超えていく未来が示唆されている。

かくして英国国教会の「聖職叙任」の意味を問う『マンフィールド・パーク』の主題は、「聖職者」「ジェントリ」「商人」「軍人」それぞれの階級のあるべ

き姿とその道徳意識を問うことになった。四つの階層がバランスよく全て取り上げられて、組上に乗せられているのは『マンスフィールド・パーク』だけである。四つの階層は重なり合いながら、その問題点を明らかにされる。その腐敗した土壌はつながっていて、この小説はイギリスが置かれていた歴史的、社会的な状況を剔抉する。しかしその中でジェイン・オースティンはまさに「牧師の娘」としての解決の道を探ろうとしたのだ。

岩井克人氏は『高慢と偏見』について、鋭い考察を示している<sup>(55)</sup>。若い女性にとって、「売れなければならない」という結婚市場において、そしてそれに向かって娘たちも親たちも狂奔する中で、エリザベス・ベネットが「売れればよいというものではない」という倫理性を持つ女性として登場する。そして理想の結婚相手を獲得する。エリザベス・ベネットが主張した倫理性とは、結局は牧師の娘ジェイン・オースティンの倫理性であり、道徳性であり、聖書の教えに他ならない。「(売れればよい) (カネがあればよい) というものではない」というジェイン・オースティンのモラル・メッセージが最もはっきりと示された作品が『マンスフィールド・パーク』であった。

Ian Watt は『小説の勃興』(Ian Watt, *The Rise of the Novel*, 1957)において、『ロビンソン・クルーソー』が宗教的な個人真理への関心が物語の主題となる道を拓いたとして、この傾向はサミュエル・リチャードソン、ジョージ・エリオット、D・H・ローレンスといった小説家に引き継がれたと述べている。彼らは皆、「人生を絶え間のない道徳的、社会的な葛藤の場とみなす非常に積極的な人生観の持ち主であった。彼らは皆、日常生活での一つ一つの出来事は、理性と良心を精一杯働かせてはじめて正しい行動ができるのであって、それは本質的に道徳と関わる問題を提起するものであると考えた」としている。<sup>(56)</sup> 小説のはるかな起源にはコンダクト・ブックがあった。<sup>(57)</sup>

これらの作家の作品は『ロビンソン・クルーソー』がそうであったように、道徳的な指針を与えることを底辺に持つという意味ではコンダクト・ブックの流れの延長線上にあるといえよう。そしてその意味からジェイン・オースティンもこれらの作家の列に連なり、『マンスフィールド・パーク』もそのはるかな起源にコンダクト・ブックを持つ。さらに当時の社会が直面する問題の根底にまで透徹した目を向けたという点では、『マンスフィールド・パーク』はまた一八世紀初頭からその後続く“condition of England novel”の優れた先駆けとなったといえるのではなかろうか。小説家ジェイン・オースティンの偉大さの意味は深い。

## 注

- 1 Deidre Le Faye, *Jane Austen: A Family Record* (Cambridge UP, 2004), p.194.  
以下 *Family Record* とする。  
Deidre Le Faye (ed.) *Jane Austen 's Letters* (Oxford UP, 2014), p. 210. *Letters* No.79.  
以下 *Letters* とする。
- 2 *Letters*, p.420.
- 3 ジェイン・オースティンは「田舎の三、四家族こそ格好の小説の材料」だとしてそこに登場する限られた人々の心理や性格や日々の暮らしをまるで「象牙細工」のように犀利に緻密に彫り上げているとはよく知られた言葉である。ファニーの細やかな心理描写や、一瞬にしてミス・ベイツの性格、彼女の全人生を白日のもとにさらすようなお喋りなどがその見事な例としてよく指摘される。しかしジェイン・オースティンが小説で成し遂げたことはそれにとどまらない。彼女は「象牙細工」の象牙そのものの実体も把握していた。把握しようと試みていたと言うべきか。象牙細工ができるほど、彼女の小説の材料は硬いものではなかったからだといえる。本論の狙いは象牙そのもののあまりにも「堅くない質」を探ることにある。
- 4 *Family Record*, 203.
- 5 *Family Record*, 91.
- 6 *Family Record*, 101.
- 7 *Family Record*, 101.
- 8 Irene Collins, *Jane Austen and the Clergy* (Hambledon and London: The Hambledon Press, 2002), p.24.
- 9 Thomas Hardy, *Jude the Obscure* (Macmillan Paperbacks, 1986), II-2, p.69.
- 10 Collins, p.92.
- 11 Collins, p.49-60.
- 12 *Family Record*, p.17.
- 13 Brian Southam, *Jane Austen and the Navy* (London: National Maritime Museum Publishing, 2005), pp.20-21.
- 14 *Family Record*, pp.50-52.
- 15 Collins, p.32.
- 16 『マンスフィールド・パーク』(中野康司訳、筑摩書房、二〇一五年) 一三七頁。この小説に関しては全作品を翻訳された中野康司氏の訳をつかわせていただいた。本書からの引用は末尾に章番号を記した。オースティンの他小説からの引用は拙訳による。
- 17 Claudia L. Johnson and Clare Tuite (eds.), *A Companion to Jane Austen* (Oxford: Wiley-Blackwell, 2009), p.314.
- 18 Janet Todd (ed.), *Jane Austen in Context* (Cambridge UP, 2010), Religion, p.409.  
以下 Todd (ed.) ページで記す。

- 19 James Gibson (ed.), *Thomas Hardy: Interviews and Recollections* (London: Macmillan, 1999), p.178.
- 20 *Letters*, No.66, p.177.
- 21 *Letters*, No.109, p.292.
- 22 ここでは巷間のホットな話題がさりげない形でエルトン夫人とジェインの会話の中に取り入れられているのだが、非常に周到に、しかも意図的に挿入されていると考えるのが妥当であろう。ジェイン・オースティンの時代への関心の鋭さを考えさせられる場面だといえる。
- 23 Todd (ed.) *Agriculture*, p.188.
- 24 *Family Record*, p.183.
- 25 Southam, p.257.
- 26 Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (London: Macmillan, 1985), p.56. サイモン・ストークスは南部に地所を求めてやってくるが、その際に商人であったことがわからないような名前を付け足すことを思いついた。この男は大英博物館にこもって「すでに滅びてしまったり、滅びかけていたり、世間から忘れられたり、零落したりした旧家のことを扱った著作を一時間ほどかけて調べ上げ」(5章)、そのなかから、名前の響きも格好も良さそうなダーバヴィルを選んで、元からの家名に付け足したのだった。土屋倭子『トマス・ハーディの小説と二人の妻』(音羽書房鶴見書店、二〇一七年)一一九頁。
- 27 ジョン・ブリュア『財政＝軍事国家の衝撃』大久保桂子訳(名古屋大学出版会、二〇〇三年)四頁。
- 28 ブリュア、二一三四頁。
- 29 Todd (ed.), *Trade*, p.419.
- 30 参照 Stephanie Barczewski, *Country Houses and the British Empire* (Manchester UP, 2014), pp.1-121.
- 31 Todd (ed.), *Landownership*, p.272.
- 32 Todd (ed.), *Trade*, p.415.
- 33 Todd (ed.), *Money*, p.317.
- 34 *Family Record*, p.84.
- 35 *Family Record*, pp.130-1.
- 36 Todd (ed.), *Trade*, p.418.
- 37 Todd (ed.), *Trade*, p.421.
- 38 マーカス・レディカー『奴隷船の歴史』上野直子訳、(みすず書房、二〇一六年)五頁。
- 39 Todd (ed.), *Trade*, p.421.
- 40 *Letters*, No.78, p.207.
- 41 Todd (ed.), *Nationalism and empire*, p.332.
- 42 *Family Record*, p.234.
- 43 近藤和彦『イギリス史10講』(岩波新書、二〇一三年)一五七頁。
- 44 ブリュア、三八頁。

- 45 プリュア、三九頁。
- 46 Todd (ed.), *Professions*, p.372.
- 47 Todd (ed.), *Professions*, p.373.
- 48 プリュア、六七ページ。
- 49 Southam, p.21.
- 50 Southam, pp.30-32.
- 51 *Family Record*, p.65.
- 52 *Family Record*, pp.139-40.
- 53 Claudia L. Johnson and Clara Tuite (ed.), p.262.
- 54 プリュア、六九―七〇頁。
- 55 岩井克人「資本主義の中で生きるということ」『学術の動向』（日本学術協力財団、二〇一一年、十一月）二一頁。
- 56 Ian Watt, *The Rise of the Novel* (Chatto & Windus, 1957), pp.84-5.
- 57 参照 土屋倭子「『ロビンソン・クルーソー』というイギリス小説の〈始まり〉—非国教徒・商人・中産層—」『津田塾大学紀要』No.51, pp.1-40.

### 主要参考文献

- Austen, Jane, *The Works of Jane Austen*, vi, *Minor Works*, ed. R. W. Chapman (Oxford, 1954)
- \_\_\_ *Sense and Sensibility*, Penguin Books, 2003.
- \_\_\_ *Pride and Prejudice*, Penguin Classics, 1985.
- \_\_\_ *Mansfield Park: The Novels of Jane Austen: The Text Based on Collation of the Early Editions*, ed. R. W. Chapman, 3<sup>rd</sup> edn 5 vols, Oxford, 1953, vol.III.
- \_\_\_ *Mansfield Park*, Cambridge UP, 2005.
- \_\_\_ *Emma: The Novels of Jane Austen: The Text Based of Collation of the Early Editions*, ed. R. W. Chapman, 3<sup>rd</sup> edn 5 vols, Oxford, 1952, vol. IV.
- \_\_\_ *Northanger Abbey and Persuasion: The Novels of Jane Asuten: The Text Based on Collation of the Early Editions*, ed. R. W. Chapman, 3<sup>rd</sup> edn 5 vols, Oxford, 1954, vol. V.
- \_\_\_ *Lady Susan, The Watsons and Sanditon*, Penguin Classics, 2003.
- Austen-Leigh J. E., *A Memoir of Jane Austen and Other Family Recollections*, Oxford World's Classics, 2008.
- Barczewski, Stephanie, *Country Houses and the British Empire*, Manchester UP, 2014.
- Butler, Marilyn, *Jane Austen and the War of Ideas*, Oxford: Clarendon Press, 1976.
- Byrne, Paula, *The Real Jane Austen*, London: William Collins, 2013.
- Clery, E. J., *Jane Austen: The Banker's Sister*, London: Biteback Publishing, 2017.
- Collins, Irene, *Jane Austen and the Clergy*, London and New York: The Hambledon Press, 2002.

Copeland, Edward and Juliet McMaster (eds.), *The Cambridge Companion to Jane Austen*, Cambridge UP, 2014.

Hubback, J. H. and Edith C. Hubback, *Jane Austen's Sailor Brothers*, London: Fulcroft Library Editions, 1976.

Johnson, Claudia L. and Clara Tuite (eds.) *A Companion to Jane Austen*, Oxford: Wiley-Blackwell, 2009.

Le Faye, Deirdre, *Jane Austen: A Family Record*, Cambridge, 2004.

\_\_\_ (ed.) *Jane Austen's Letters*, Oxford UP, 2014.

Said, Edward W., *Culture and Imperialism*, New York: Vintage Books, 1993.

Southam, Brian, *Jane Austen and the Navy*, Hambledon and London: National Maritime Museum Publishing, 2005.

Todd, Janet (ed.), *Jane Austen in Context*, Cambridge UP, 2010.

Watt, Ian, *The Rise of the Novel*, Chatto & Windus, 1957.

Wiltshire, John, *The Hidden Jane Austen*, Cambridge UP, 2014.

岩井克人「資本主義の中で生きるということ」『学術の動向』（日本学術協力財団、二〇一一年一月）

内田能嗣/塩谷清人編『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』（世界思想社、二〇〇七年）

ジェイン・オースティン『ジェイン・オースティンの手紙』新井潤美編訳（岩波書店、二〇〇四年）

ジェイン・オースティン『マンスフィールド・パーク』中野康司訳（筑摩書房、二〇一五年）

ブリュア, ジョン『財政=軍事国家の衝撃』大久保桂子訳（名古屋大学出版会、二〇〇三年）

日本オースティン協会編『ジェイン・オースティン研究の今』（彩流社、二〇一七年）